

今話題の国際交流



若 者

大 橋 貴 生*

My feelings for international academic exchange as a job

Key Words : Biotechnology, English, International, Southeast Asia, UNESCO

1. はじめに

大阪大学生物工学国際交流センター、今、私が所属している組織です。当初、赴任する前までは、国際交流と言えば、文化交流などのイメージはありましたが、研究を通じた国際交流とはどういったことをしていけば良いのだろうか、と不安を覚えていました。当センターでは主に東南アジア諸国の大学との学術交流をメインに行っています。いざ赴任してみるとセンター内には、当時、それまででは経験が無いほど、たくさんの主として東南アジアからの留学生が在籍していました。そこで、このたび「生産と技術」に執筆する機会をいただき、何でも自由に書いて良いとのことでしたので、私が当センターに着任して以来、初めて経験した東南アジアからの研究者および留学生との交流を通して感じたことについて述べていきたいと思います。

2. 英語について

もちろん、外国人研究者や留学生との会話は英語で行います。学生時代にも海外学会での発表や、短期滞在の留学生との交流で英語を使う機会はあったものの、頻繁に英語を話す経験は無く、当初は毎日英語を話す環境に戸惑いだらけでした。ご多分に漏れず、英語を話すと言うことはアメリカ人やイギリス人などのネイティブが喋るような英語をイメージ

しておりましたので、実際の自分の英語を話すスキルとそのネイティブが喋る英語のイメージとのギャップで気後れしたことも事実です。毎日、東南アジアの留学生と英語で会話していると、いろいろとネイティブの方が話す英語との違いが分かるようになってきました。日本人が話すジャパニーズイングリッシュに癖があるように、各国それぞれの話し方、アクセント、イントネーションがあり、ジャパニーズイングリッシュを恥ずかしがる必要が無いように感じてきました。例えば、タイの方は「l」を「n」と発音する傾向があり、「Sample」が「サンブン (3分?)」と聞こえ、何度も聞き直した記憶があります。その他、インドネシアの方は「gi」や「gy」を「ギイ」と発音して、例えば「Technology」を「テクノロギイ」と発音します。このような感じで毎日会話していると、向こうの癖にも慣れて、聞き取りやすくなりますし、留学生の方もジャパニーズイングリッシュの癖に慣れてきて、コミュニケーションがスムーズになってきました。最終的には、ネイティブレベルまでの英会話能力を求めず、会話の1ツールとして英会話を捉えるのであれば、車の運転のように、英会話への慣れが大事である、と言うのが個人的な結論です。

3. 東南アジア留学生について

東南アジアの留学生と一括りにしても、お国ごと、個人個人でももちろん様々な個性があります。タイは年功序列の文化が強く出ており、タイ人留学生に聞いたところ、初めて会うときに、見た目で年齢が判別できない場合、「初めまして」「おいくつですか?」と言った会話が成り立つそうです。その情報を元に呼び捨てにするのか、敬称をつけるのかを気にしているみたいです。また、先生は学生にとってかなり目上の人として扱われ、来日当初は、私とディスカ



* Takao OHASHI

1978年12月生

大阪大学 大学院理学研究科 化学専攻 (2007年)

現在、大阪大学生物工学国際交流センター 助教 博士(理学) 糖鎖生化学

TEL: 06-6879-4085

FAX: 06-6879-7454

E-mail: ohashi@icb.osaka-u.ac.jp

ッションをするときには膝をついて話をしていました。日本でも年功序列がありますが、タイの文化ではより強く出ているようです。それでも日本の生活が長くなると、日本式に慣れ、そこまで（日本人的には）極端な敬礼の仕方は減ってきます。基本的にとても真面目で、また行間を読もうとするので、日本人の「言わなくても分かる」と言うのが比較的通用します。そういった日本人と共通するメンタリティーが、多くの日本の大学や企業がタイに進出している原因の一つのように感じます。インドネシアの留学生は圧倒的にムスリムの人が多く、宗教的な儀式を日常的に行っており、毎日定期的にお祈りのためにお祈り専用の部屋に向かいます。ムスリムは戒律を厳格に守るイメージがありますが、ムスリムの中でもいろいろ宗派や個人の解釈の違いがあり、飲酒やハラルフードに関して、どこまで許されるのが個人で異なります。例えば、パーティーでは飲酒OKな人（泥酔しなければOKだそうです）、一滴たりとも口にしてはいけない人、スナック等で豚肉エキスが少しでも入っている可能性をとことん気にする人、豚肉エキスの表示が無ければ気にしない人（この場合厳密に豚肉エキスが入っているかどうかは判別不能です）、かなり多種多様です。お酒を飲む、飲まないにかかわらず、陽気な個性の人が多く、パーティー中ずっと声を上げて笑っているイメージがあります。最近、フィリピン人留学生が増えてきたのですが、彼らは大物感が漂う大らかさと明るさが目立ちます。彼らと日々接していると、良いのか悪いのかは別として、彼らにとって日本人は細かいことを気にしすぎるように思います。その他、私が赴任してからに限れば、当センターにはベトナム、マレーシア、韓国、中国や台湾からの留学生が在籍しています。留学生だけでなく、一日だけの訪問および数週間から数ヶ月の短期的な滞在まで広げれば、モンゴル、オランダ、イタリア、フランス、アメリカ、バングラディッシュ、インド、ラオス、パキスタンの方々と交流しました。

4. 国際交流のお仕事

基本的な生物工学国際交流センターでの国際交流の業務は阪大に在籍している留学生の教育、外国人研究者短期研修（主に最先端の生物工学的な研究を研修していただきます）、など、学生を含む外国人

研究者の当センター滞在に関わるお世話が主な業務となります。それと、当センターの歴史ある一大プロジェクトである国際大学院プログラム UNESCO Biotechnology School in Asia に触れないわけには参りません。この事業は私がこの世に誕生したぐらいの年から、過去約35年間に渡り当時の醗酵工学科（現在応用生物工学科）と協働して開始された UNESCO 微生物大学院研修講座、UNESCO バイオテクノロジー国際大学院研修講座と進化を続け、総勢450名を超える修了生を輩出しております。修了生たちは母国で政府高官、大学長、教授などの要職に就かれ、彼らが指導している学生および、さらにその学生が指導している学生の派遣、母国での取りまとめ等、現在のプロジェクトに多大な貢献をし、脈々と歴史を紡いできております。もちろんこれらの要職に就かれている方々は、私にとっては雲の上の存在であり、これらの方々とこのような事業を通して交流させていただく贅沢を感じております。これら要職に就かれている大先輩方より、母国のこと、UNESCO 研修生時代の昔話などについて、機知に富んだお話しをしてくださいます。その中でも、現在の大阪大学の教授、名誉教授の先生方の若かりし頃の様々なエピソードなどは、いつも興味深く聞いております。このようなお話を聞いていると、東南アジアの国々との年代を超えた有機的な繋がりの一部を担っていると感じます。

5. タイについて

本センターは歴史的にタイとの繋がりが強く、タイの研究者や学生が頻繁に往来しています。そういった強い結びつきの元に、当センターに着任以来、私も少なくとも1年に1回以上は学術交流のために、タイを訪れています。向こうに行けば、バンコク市内およびその近郊に点在する大学や国立研究所等を回って、セミナーをしたり、共同研究の打ち合わせをしたり、郊外のキャンパスを視察したりします。このような機会にタイの大学等を訪れたときに、当センターに短期滞在されていた学生や研究者の先生方とお会いし、再会を祝すのは非常に楽しいものです。東京オリンピック招致のときに、日本人の「おもてなし」の精神をアピールポイントして、話題になっていましたが、タイへ訪問したときに受けるおもてなしを経験すると、我が身を反省せざる

を得ません。具体的に例を挙げると切りがありませんが、想像を遙かに絶し、感動するほどです。おそらく、私たちをもてなすために、自分自身の仕事をかなり犠牲にしていると思います。外国人研究者や留学生が当センターに滞在するときには、もう少し頑張っただけで何かできることはないのかと自問自答しています。また、毎回、バンコクを訪ねるたびに町並みやキャンパス内の建物の様子が変わり、タイの活気が感じられます。バンコクダウンタウンの町並み、キャンパス内の新しい建物は大阪や東京と遜色ないように感じます。しかし、「20年、30年前はここまで発展していなかったんだよ」と、大先輩の先生方

に良く教えていただくのですが、そのたびに先生方のパイオニアとしてのご苦勞を感じずにはいられません。タイに限らず、ASEAN 諸国においても、このような経済的および学術的な著しい発展はニュースでも伝えられています。私たちの世代としては彼らに追い越されないようにつりリーダーシップをとれるように日々努力していく必要があるように感じます。それと同時に、今まで紡いで来られた歴史を踏襲して、このような素晴らしい人から人へのバトンを次世代に滞りなく渡していくために努力していきたいと思っています。

